

安井広済先生の逝去を悼みて

宮下 晴 輝

一九九五（平成七）年三月八日、安井先生は七十九歳の生涯を終えられた。その間、数多くの学生をお育てになるとともに、数々のご業績を残された。先生がその生涯を捧げられたご研究の広さと深さを顧みるとき、講筵の末席に列した一人として、感慨無量のものがある。

一九七四（昭和四十九）年にはじめて先生のゼミに参列したときは、チャンドラキールティの『中論』の注釈書 *Prasamapada* の第二十五章を読んでいるところであったと思う。その後は、*Sadharmapundarika*（法華経）、*Mahāvāsanāgraha*（撰大乘論）、*Yogacarābhūmi*（瑜伽師地論）などをつぎつぎと読んでいただいた。チベット語訳を参照しながらサンスクリットのテキストを厳密に読み進んでいくというスタイルは、終始一貫していた。このようなゼミを通してわれわれ学生はテキストにはりつくかのようにして読むことを身につけていった。しかも先生のご関心は、それらのテキストの思想を読みとることにあつた。したがって、サンスクリットに対応する漢

語を当てはめて訳し終わったとする態度には厳しく注意され、一つの言葉をどのように理解しているのか確かめられることがしばしばあつた。

先生は、*Lankavatrasūtra*（楞伽経）から研究をはじめられ、山口益先生と鈴木大拙先生がその卒業論文の審査にあられたことを光榮とされ、われわれにまでよくそのことを話された。後年それが『梵文和訳入楞伽経』（一九七六）として全訳公刊されている。また、とりわけ山口博士の『仏教における無と有との対論』をよき指南書とされて、中観学派の研究へとその矛先を向けていかれた。そしてチベット語訳で伝えられているバーヴァヴィヴェーカーの *Pratīpatti*（般若灯論）とアヴァローキタヴラタのその註釈をとりあげられた。とくにその第二十五章の翻訳と解釈的研究は、先生のその後の研究を決定的に方向づけるものであつた。

一九五三（昭和二十八）年の「二諦説と三性説」（大谷学報第三十三卷一号）という論文を皮切りに、「中観思想と瑜伽唯識思想との対決」をテーマにつぎつぎと重要な論稿を発表されていった。それがやがて一九六一（昭和三十六）年の学位請求論文『中観思想の研究』として結実することになる。

先生の生涯のお仕事は、ナーガールジュナ（龍樹）の二諦説の研究であったといってもいいだろう。そのことを、先生がおそらく生前に自ら選ばれたのであるう、「中観院釈広濟」の法名がよく物語っている。静かなご生涯のなかで、研究への熱い情熱と強い自負が伝わってきて、われわれを勇気づけてくださる思いがする。研究の名をもって莊嚴されたご生涯を念ずるとき、先生の穏やかな笑みが心いっぱい広がってくる。

最後に、三月十日のご葬儀に参列したおりに読ませていただいた弔辞を、ここにあらためて掲載させていただきます。

弔 辞

先生の突然のご逝去を悼み、一言御礼の言葉を申し上げます。

先生は、昭和十四年（一九三九年）に大谷大学をご卒業になり、それ以来永年にわたり、大学での教育と研究にご尽力くださいました。特に、昭和三十六年（一九六一年）に『中観思想の研究』と題するご著書をまとめられ、文学博士の学位を取得されました。そして、昭和三十九年（一九六四年）に山口益先生のご退職後、その後

を次いで、インドの大乗仏教の研究を中心に、数々のご業績を発表され、また数多くの卒業生をお育て賜りました。また、昭和五十三年（一九七八年）から二年間、大谷大学図書館長のご重責を果たされ、昭和五十六年（一九八一年）にご退職され、大谷大学の名誉教授とられました。

先生のご業績は、『中観思想の研究』をはじめとして、『梵文和訳入楞伽經』、『唯識二十論講義』、『維摩経略解』などのご著書、そのほか数多くのご論稿があります。そしてその研究領域の幅広いこと、奥深いことは、そのまま先生がつねに堅持された学問研究の姿勢からくるものと拝察いたします。

インドのサンスクリット語原典にもとづいた仏教研究を中心にして、さらに厳密にテキストを読むため、チベット語訳、漢訳を参照するという仏教研究の方法は、先生が師事されました山口先生の確立されたものであります。先生もまたこの厳密な文献学研究を続けられ、私たちの前に展開して見せてくださいました。

先生から学ばせていただきました大きな宝は、決して妥協することなく、徹底して事柄そのものを明らかにしていこうとする研究姿勢と方法であります。それは、文

献研究とは思索し意味を明らかにすることであり、そのために現代の言葉で表現するための努力を惜しまないこととであります。

そしてまた先生がその研究生生活の厳しさを身をもってお示しいただきましたことは、私たち門下生にとつてかけがえない一大事でありました。ときには、ご息女を背負いながらあの大きなサンスクリット語辞典をひき、着物が擦り切れるほどに研究に打込まれたことなどをお聞きすることもありました。学問は、知力ばかりでなく、気力と体力にもよるのだということをも学ばせていただ

きました。先生の学問に対するこのような純粋な情熱は、私たちに分かち与えてくださいましたもつとも大切な宝物でございます。

私たちは微力でございますが、先生のご遺志をついで精進してまいりたいと思えます。

先生、ありがとうございます。

一九九五年三月十日

門下生代表 宮下晴輝

安井広済先生